

14. 新生児の泣き声に対する母親の受けとめ方

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2017-10-03 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/2297/34914

第3群：14

新生児の泣き声に対する 母親の受けとめ方

金沢大学医学部保健学科

○田淵 紀子, 島田 啓子
坂井 明美, 小松 みどり

I はじめに

乳児の泣き声は産声にはじまり、その後数ヵ月間、乳児の内的情報を伝達する最も顕著な行動といえる¹⁾。

出生直後の新生児は、泣くことによって自分のニーズ（空腹、痛み、不快等）を母親に伝えるが、母親が児の泣き声に適切に対応できないと、その後、育児不安が増大し、適切な育児行動の喚起を妨げ、やがて育児ノイローゼに陥る可能性がある。したがって、母親が児の泣き声に適切に対応できるよう母親をサポートしていくことが重要である。

乳児の泣きに関するこれまでの研究には、泣き声のタイプの音声学的分析²⁾や、ダウン症などの医学的な問題のある児の泣き声の特徴³⁾などが提示されている。しかし、sound spectrogramによるこれらの音響学的分析研究は、主に異常の診断を目的としたものである。また泣き声に対する生理学的反応として、心拍、血圧などの実験研究もされている。しかし、母親がどのようにして児が泣いていることを理解し、対処しているのかというプロセスについては、十分に分析されていない。また、その対処行動に関する要因についてはまだ明らかになっていない。

そこで、児の泣き声に対する母親の受けとめ方や、母親がいつごろどのようにして児の泣きの意味をみきわめていくようになるのかを明らかにし、援助に役立てる必要がある。そこで、出生後1週間における児の泣き声に対して、母親がどのように受けとめ、反応しているのかを質的に探り、そのプロセスを明らかにすることを目的とした。

II 方法

調査対象：金沢市内のMクリニックにて、出生した正常な新生児をもつ母親16名

調査方法：出生後、母児同室制をとっている母子のもとを訪れ、研究の趣旨を説明し、承諾を得た後、児の泣き声についての受けとめや感情、対処行動について半構成的に面接を行った。面接内容は、1名を除き承諾を得て録音し、逐語録をおこした（1名の面接内容は書き取った）。

III 結果

1. 対象の概要

母親の平均年齢は、27.1歳（24～33歳）、初産婦9名、1経産婦7名。帝王切開1名を除いて、他は経膣分娩であった。子どもの在胎週数は、36週以上、41週未満であった。出生時体重の平均は3068gであり、分娩当日と翌日の夜間を除く入院中は原則的に母児同室制をとっていた。面接時の産後日数は、2日目から7日目であった。一人当りの面接所要時間は、20～50分間を要した。

2. 児の泣き声に対する母親の反応

児の泣き声に対する母親の反応として、母親には、＜児の泣きに対する潜在的意識（理解）＞が基盤にあり、実際にわが子の泣き声を耳にしたとき、＜感情や情動反応＞がおけると同時に、＜児の泣きの解釈＞をし、＜具体的な対処行動＞が試みられていた。さらに、母のとった具体的な行動に対する児の反応

(泣きやむ、泣き続ける)を介して、ききわけのいい子のように<児の性格・気質の評価>をしていた。

以下に、児の泣き声に対する母親の反応の各々の構成要素を記述し、さらに泣きに対する意味が大体つかめている母親と混乱している母親の対称的な2事例について紹介する。

1) 児の泣き声に対する母親の反応の構成要素

(1) 児の泣きに対する母親の潜在的意識(理解)

赤ちゃんが通常、泣くという意味に対して、大方の母親は「おなかがすいたから」「おっぱいがほしいから」「おむつがぬれているから」「何かして欲しいから」など何らかの理由があるのだと理解していた。一部の母親は、「理由なく泣くこともあるだろう」と表現されるように、特にこれといった理由がなくても泣くことがあると理解していた。

(2) わが子の泣き声を聞いたときの情動反応

実際にわが子の泣き声を耳にした時、母親は「いとおしい」「うれしい」「かわいい」「幸せな気分」と感じ、「自分の子どもなんだ」「泣いていた方が元気がいい」と認識する母もいた。また、すぐに○○してあげたいのにそれができない、早く満たしてあげたいとの思いもみられた。

(3) 泣きの解釈

① 児の要求の見極め

実際にわが子の泣き声を耳にした母親は「どうしたんだろう、何かあったのかな」「おっぱいほしいのかな」「だいてほしいのかな」「おむつとりかえてほしいのかな」「おむつかおっぱいかのどちらかだわ」というように、児の要求を察知しようとするような泣きの意味の分析がみられた。

さらに、母親は児の要求を「おっぱいのときは口をバクバク動かすのでおっぱいかな?」「うんちの時はすごく大きな声できばっている」など泣き声だけでなく、児の表情、排泄状況や声の大きさなど泣

き声を耳にしたときの状況全体をとらえて、見極めようとしていた。

逆に、(児の泣き声は)「いつも同じように聞こえる」「まだわからない」「おっぱいのときしかわからない」など児の要求の見極めがまだできていない事例もあった。

② 児自身の自己調整

経産婦の中には、児が周りの様子をうかがいながら泣いたり、泣きやんだりしているというように感じとっている母親がみられた。具体的には、次のような表現で語られた。

「私のこと、もうわかっているのか、私がそばにくるとなんか泣くみたいな感じのときがある。なんか、目開けて遊んでいる時でも、私と目合ったら、おっぱいくれるみたいな感じで、泣くことがあるので、もうわかっているのかなって感じがする。」

「子どもの方が、(母の)様子みながら泣いてるなどというのは感じます。(母がそばに)いるのかいないのかとか、(今は)泣いてもダメだしなっている感じでちょっとおさまってみたりとかします。」

「きのう(出生1日目)は大部屋だったんで、新生児室に戻ると泣いて、こっちにくると、何もしないのに泣きやんでっていう感じでした。」

以上のように、児の泣きには、母親の状況をみながら泣いたり、泣きやんだりというような自己調整的な解釈の側面もあるようであった。

(4) 具体的な対処行動

わが子の泣き声を聞いたとき、母親は「何かしてあげなくちゃ」「だっこしてあげなくちゃ」「おっぱいあげなきゃ」「すぐにおっぱいあげたらいいのに」など、児の要求を満たすための自分の行動を思い描いていた。母親の対処行動は、「児を抱く」「おむつをみて、とりかえる」「声かけする」「おっぱいを含ませる」などであるが、児の反応をみながら、いろいろ試みられ、児が泣きやむまで、この

ような対処行動が繰り返されていた。この時期は「とりあえずおっぱい」と語られるように、児の泣きに対する母親の対処行動は、おっぱいを含ませる行動が中心となっていた。

(5) 児の性格・気質の評価

児に対しては、「あまり泣かない。泣くときは、おむつかおっぱいのどちらかだけ。今のところ、泣いて困るということはない。」「とてもおりこうな子。今のところ泣いて困るということはない。泣けばとりあえずおっぱい。今のところ吸ったら泣きやむ。」「思ったよりききわけのいい子」「あまり泣かない。おとなしい子」というような児のとらえ方をしたり、反対に「だっこしてもすぐ泣きやんだりしないし、なんか理由なく泣いたりとか、ちょっとむずかしい子」ととらえている事例もあった。このように、児の泣きに対してとった母親の対処行動と、その行動の結果（児の反応）を通して、児の性格・気質の評価へとつながっていた。

2) 対称的な事例の比較

(1) 事例1：児の泣きの意味を大体つかんできると思われる事例

事例1は、生後7日目の1経産婦である。

児が泣くのは、「しゃべれないから、おっぱい欲しいとか、抱いてほしいとか、おむつかえてほしいとか、何かしてほしいというので泣いて訴えている」というふうに泣く理由があると理解している。実際に児が泣くと、まず、抱くという行動をとっている。これにより、児はだいたい泣きやむが、お腹が空いているのかなと思うときは、抱いておっぱいをやり、それでも泣くようなら、もうちょっと抱くという行動をとっている。

児の泣きがおっぱいを意味しているのか、おむつなのかという区別については、次の様に述べている。「口がね、何か欲しそうな口するんですよ。そんなときはおっぱいかなと思うし、ウンチしている顔も

わかるんです。無表情で、なんか大人でもちょっとがまんしているような、うまく表現できないけど、むずかしい顔するんです。がんばっているというか、考えているような顔で、ウンチかなと思う。そういう顔した後にだいたい、音がグチグチってするからわかるんです。」

児については、「そんなにぐずってあばれることもないし、よく寝るし、困らせる子ではない。」と評価していた。

(2) 事例2：児の泣きの意味がよみとれずやや混乱していると思われる事例

事例2は、産褥4日目の初産婦である。

児が泣くということに対しては、「理由なく泣くこともある」と理解している。実際に児が泣くと、「最初ちょっとあわてるけど、どうしたんだろう?」と思い、「まずだっこして、でも泣きやまないの、おっぱい飲ませてみる。そうすると泣きやむ。必ずおっぱい飲ませるんだけど...。」と児の泣きの対処方法の最終手段がおっぱいであることが伺える。

児の泣きについては、「たいして泣かない。もともとあんまり泣かないみたい。」と、泣きの頻度が多くないと認識している。しかし、児の泣きの生後の変化として「泣く回数が増えた。最初はすごくおとなしい子やと思ったけど、だんだん泣くようになった。」「いつも同じ泣き方に聞こえるし、なぜ泣いているのかわからない。」と語った。

児については、「まだ、だっこしてもすぐ泣きやまないし、ちょっとむずかしい子」との印象をもっていた。

IV 考察

以上の結果から、児の泣き声に対する母親の反応は、大まかには図1に示すような構成要素をたどって行動化されていた。つまり、上述してきたように、母親には児の泣きに対する潜在的意識（理解）があ

り、実際にわが子の泣き声を耳にしたとき、いとお
しいなどの感情や情動反応がおこると同時に、泣き
声の意味が分析され、具体的な対処行動が試みられ
ていた。母のとった具体的な対処行動の結果、つま
り、児が泣き続けるか泣きやむかという児の反応か
ら、泣き続ける場合、再び泣きの意味の分析がされ
対処行動がとられていく。このように母の対処行動
と児の反応のプロセスの中で、母は対処が妥当であ
ったかどうかを判断し、さらに児の性格・気質の評
価へとつなげていた。出生後早期において、泣きに
対する母親のこれまでの対処行動や児の反応からの
経験学習の中で児の性格・気質が評価されていると

いう事実は、将来の母子関係形成の素地になるとい
う点で、興味深い知見が得られた。

V 結論

今回、児の泣き声に対する母親の受けとめ方につ
いて質的な分析をした結果、5つの構成要素が明ら
かにされた。その構成要素とは、＜児の泣きに対す
る潜在的意識（理解）＞、＜わが子の泣き声を聞いた
ときの感情・情動反応＞、＜泣きの解釈＞、＜具
体的な対処行動＞、＜児の性格・気質の評価＞であ
った。

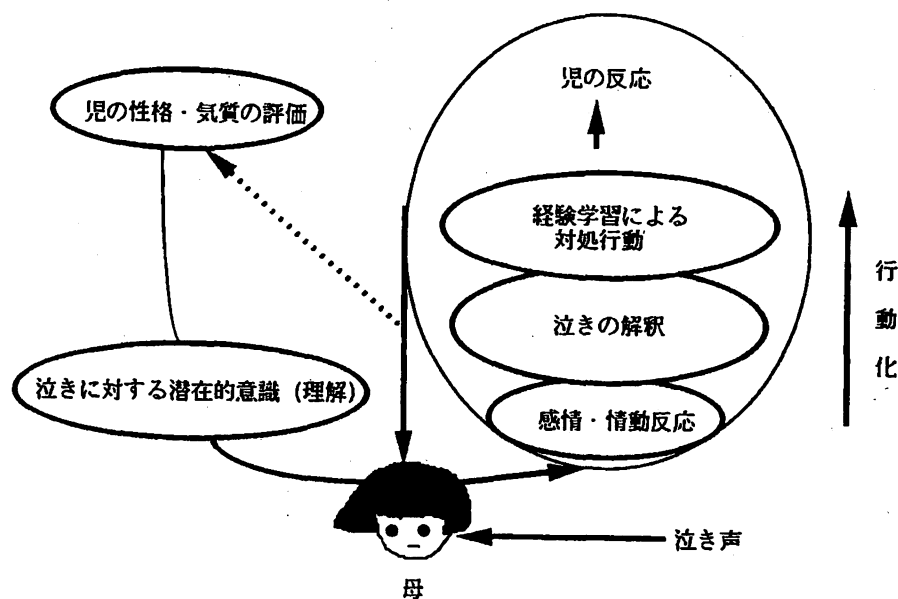


図1. 児の泣き声に対する母親の反応の仮説モデル

引用・参考文献

- 1) 竹中和子：乳児の泣きと乳児－保育者相互作用，日本赤十字看護大学紀要，1992。
- 2) Wasz-Hockert, et al. : The infant cry: a spectrographic and auditory analysis. 1968.
- 3) 大井 照，馬場一雄：泣き声と表情，改訂小児生理学，へるす出版，1994。
- 4) 足立智昭他：乳児の泣き声に対する母親の対処行動に関する研究，母性衛生，25，2，1984。
- 5) 竹中和子：乳児の泣きと乳児－保育者相互作用，日本赤十字看護大学紀要，1992。
- 6) 陳 省仁：新生児・乳児の「泣き」について，北海道大学教育学部紀要，48；188－206.1986。
- 7) Belinda J. Pinyerd, I : fant Cries: Physiology and Assesument, NEONATAL NETWORK, 13, 4, 1994.
- 8) Jane E. Drummond, et al : The Development of Mothers Understanding of Infant Crying, 1993.